

# Point of View and Narrative Voice in Discourse Analysis of Narrative

—A Case of ‘NP + V ing’ Phrase—

山 岡 實

## はじめに

物語談話 (narrative discourse) における当該文脈において、次のような (1) a および (2) a の「NP + V ing」句が用いられる。

(1) a. And suddenly I saw our reflection in the mirror. Sylvia choking and myself strangling her.<sup>1)</sup> (Christie<sub>1</sub>: 12)

b. I saw Sylvia choking and myself strangling her.

(2) a. He turned toward the TV screen, to enjoy more of the reportage from Colombia . . . people wading mud up to their neck . . . Superman flying up . . . (Kotzwinkle: 129)

b. people were wading mud up to their neck . . . Superman was flying up . . .

なぜ、この場合、選択可能な対立的言語形式と考えられる (1) b および (2) b<sup>2)</sup>ではなく、この「NP + V ing」句が選択されたのだろうか。作者は、この両言語形式のうち、恣意的にこの「NP + V ing」句の方を選択したのだろうか。あるいは、ある特定の表現効果をねらって、意図的に「NP + V ing」句の方を選択したのだろうか。

物語談話は、出来事を捉える基点としての視点 (point of view)<sup>3)</sup> および出来事を読者に伝達する媒体としての物語る声 (narrative voice) を巧妙に操作して構成されている。そこで、本稿では、この物語談話の構成に関与する重要な二つの概念、視点と物語る声を考慮に入れ、「NP + V ing」句およびその選択可能な対立的言語形式双方において、それぞれの場合、その言語形式によって表される出来事は、誰の視点から見ている<sup>4)</sup>ものであるかということおよび誰が語っているものであるかということと同時に考えてみることによ

って<sup>5)</sup>、上記の問いに答えていくことにする。

まず、第一節では、「NP + V ing」句によって表される出来事は、誰の視点から見ているものであるかを検討してみる。次に、第二節では、対立的言語形式によって表される出来事は、誰の視点から見ているものであるかということおよび誰が語っているものであるかということを考えてみる。そして、第三節では、第二節の結果に基づいて、「NP + V ing」句によって表される出来事は、誰の視点から見ているものであるかを検討してみる。最後に、第四節では、第一節から第三節までの結果を総括して、「NP + V ing」句および対立的言語形式がどのような伝達様式 (narrative transmission) による表現形式であるかを比較検討し、「NP + V ing」句の表現効果および当該文脈において選択される理由を考えてみる。

## 1 「NP + V ing」句と視点

ここでは、具体的事例に即して、「NP + V ing」句の典型的に現れる文脈を十分に吟味しながら、「NP + V ing」句によって表される出来事が、誰の視点から見ているものであるかを検討する。以下、知覚する対象が、目の前で起こっている出来事で、知覚可能な (perceptible) 場合と、知覚する対象が過去に起こった出来事で、知覚不可能な (non-perceptible) 場合とに下位区分して、順次、みていく。

### 1.1 知覚対象が知覚可能な場合

知覚している場面が、知覚を示す語句によって明示される場合と文脈によって暗示される場合がある。

#### 1.1.1 知覚を示す語句 (I saw, He saw など) により明示される場合

- (3) <sup>a</sup>At the delivery desk he saw the Macauley brothers, Homer and Ulysses. <sup>b</sup>the messenger folding telegrams and putting them in envelopes, the younger brother watching with quiet admiration. (Saroyan : 81)

三人称小説の場合で、文 a は、登場人物 he (Mr. Spangler) が Homer と Ulysses 二人を見ていることを、つまり、he の知覚している体験を語り手が対象化して客観的に描写したものである<sup>6)</sup>。が、b の「NP + V ing」句では、語り手が登場人物 he の視点に完全に移入し、he が Homer と Ulysses 二人の姿を見たその時の he の目から見ている出来事——Homer が電報を折りたたんで封筒の中に入れてるところと弟の Ulysses がそれを崇

拝の念をもって静かに見つめているところ——が描かれている。

- (4) <sup>a</sup>And suddenly I saw our reflection in the mirror. <sup>b</sup>Sylvia choking and myself strangling her and the scar on my cheek where the bullet grazed it under the right ear. (Christie<sub>1</sub>: 12)

一人称小説の場合で、登場人物としての“*I*”が鏡を見ている場面を表す。文 a は、登場人物としての“*I*”が、鏡の中に映っている自分達の姿を実際に見ているという知覚行為の体験を、語り手としての“*I*”が対象化して客観的に描いたものである<sup>9)</sup>。一方、b の「NP + V ing」句では、語り手としての“*I*”が登場人物としての“*I*”の視点に完全に移入し、登場人物としての“*I*”が鏡を見たその時の“*I*”の目から見ている出来事<sup>7)</sup>——Sylvia が息を詰まらせているところと自分自身が Sylvia の首を絞めつけているところ——が表されている。

#### 1.1.2 文脈により知覚が暗示される場合

- (5) <sup>a</sup>He turned toward the TV screen, to enjoy more of the reportage from Colombia ...  
<sup>b</sup>Yes, there was some footage of a family clinging to a floating door ...  
... <sup>c</sup>people wading mud up to their neck ...  
<sup>d</sup>Superman flying by ...  
<sup>e</sup>“Superman?”  
<sup>f</sup>SUPERMAN!  
(Kotzwinkle: 129)

三人称小説の場合で、登場人物 he (Webster) がテレビを眺めている場面である。文 a では、語り手により、登場人物 he の行為の客観的描写が行われている。文 b では、視点は登場人物 he にある（特に、Yes は he の反応を示している）が、過去時制 was や there was some footage of ... の提示文に語り手の声が聞こえる。c と d の「NP + V ing」句では、語り手は登場人物 he の視点に移入して一体化し、he がテレビを見たその時の he の目から見ている出来事<sup>9)</sup>——人々が泥に首までつかって歩いているところとスーパーマンが空を飛んでいるところ——が描かれている<sup>9)</sup>。

次の事例も同じ三人称小説の場合で、登場人物 he (Gus) が超能力を発揮してビルの壁の中をのぞき込んでいる場面である。

- (6) <sup>a</sup>Windows continued fluttering by him as he fell. <sup>b</sup>Few inside the Webcoe building even saw him, so fast did he drop by. <sup>c</sup>Owing to the velocity of his fall, Gus's perceptions were heightened and he had certain spiritual insights: ...<sup>d</sup>'fine-lookin' secretary bendin' over that desk ... <sup>e</sup>'nother one crossin' a tough pair of legs<sup>10)</sup>...  
(Kotzwinkle: 134)

文 a, b, c では、語り手により、登場人物 he の行為・状態が外側から客観的に描かれている。そして、d と e の「NP + V ing」句では、語り手が登場人物 he の視点に移入し、he が超能力により Webcoe ビルの中を透視したその時の he の目から見ている出来事——美人の秘書がかがんで机に向かって仕事をしているところと別の秘書がたくましい足を組んでいるところ——が描かれている。

## 1.2 知覚対象が知覚不可能な場合

この場合、知覚対象が、現実に目の前に起こっている出来事ではなく、過去の出来事の中の一場面で、それを想起・回想している場合が問題となる。

- (7) <sup>a</sup>Poirot half-closed his eyes. <sup>b</sup>Coming along the path ... <sup>c</sup>Gudgeon stepping ... <sup>d</sup>Gerda Christow standing over her husband with the revolver in her hand and that blank look on her face.  
(Christie<sub>2</sub>: 82)

三人称小説の場合で、Poirot が半ば目を閉じたまま、これまでの事件の経過を思い起こしている場面である。文 a は、語り手による登場人物 Poirot の行為の客観的描写である。b, c, d では、語り手が登場人物 Poirot の視点の中に入り込み、Poirot が今まさに想起している一連の出来事（情景）が描かれている。b では、Poirot が小道を歩いている意識が感知でき<sup>11)</sup>、c と d の「NP + V ing」句では、それぞれ、Gudgeon が栗の木の陰から飛び出すところと、Gerda が手に拳銃を持って、夫の死体の上におおいかぶさるように立ちすくんでいるところが、Poirot の想起している出来事（情景）として、鮮明に描かれている。

- (8) <sup>a</sup>And by some flick of a scent or a sound on a nerve, the old image - <sup>b</sup>the gardeners sweeping, the lady writing - returned. <sup>c</sup>I saw the fingers beneath

the beech trees at Elvedon. <sup>9</sup>The gardeners swept; the lady at the table sat writing. (Woolf: 181-2)

一人称小説の場合で、何かの香りと音に神経が弾かれて、I (Bernard) の記憶の中から昔の懐かしい出来事の映像 (image) が蘇ってきて、それを回想している場面である。引用箇所全体が語り手としての“ I ”による客観的描写の中に、b の「NP + V ing」句では、登場人物としての“ I ”が回想している過去の出来事の一場面、つまり、庭師が芝生を掃いて、高貴そうな婦人が何か書いている一つの情景が鮮明に描かれている。

### 1.3 まとめ

以上のように、「NP + V ing」句は、1.1 の場合、登場人物がある対象を知覚したその時の登場人物が今まさに知覚している出来事を表し、1.2 の場合、登場人物がある過去の出来事を想起・回想しているその時の登場人物が今まさに想起・回想している出来事 (情景) を表している<sup>12)</sup>。したがって、それぞれ、出来事を見ている・回想している主体は<sup>13)</sup>、登場人物であるということになる。

## 2 対立的言語形式の視点と物語る声

ここでは、「NP + V ing」句の選択可能な対立的言語形式と考えられる次のような言語形式は、誰の視点から見ている出来事を示すかということおよび誰が語っている出来事を示すかということを検討してみる。

それぞれの「NP + V ing」句に対立する言語形式として、次のような文を考えてみる。

- (3) b'. He saw the messenger folding telegrams and putting them in envelopes,  
the younger brother watching ...
- (4) b'. I saw Sylvia choking and myself strangling her and the scar ...
- (5) c'. people were wading mud up to their neck ...  
d'. Superman was flying by ...
- (6) d'. fine-lookin' secretary was bendin' over that desk ...  
e'. 'nother one was crossin' a tough pair of legs ...
- (7) c'. Gudgeon stepped ...  
d'. Gerda Christow was standing over her husband ...

(8) b'. the gardeners were sweeping, the lady was writing.

### 2.1 対立的言語形式が (i) I/He saw + NP + V ing の場合

対立的言語形式が (i) ((3) b', (4) b') の場合, (3) a・(4) a と同じように, He saw あるいは I saw が用いられて, 登場人物 he あるいは登場人物としての "I" に視点があり, 彼らの視点から今まさに出来事 ((3) b' の場合 the messenger 以下, (4) b' の場合 Sylvia 以下の部分を指す) を見ていること, つまり, 登場人物が知覚行為を現実体験していることが示されている。が, 一方では, 登場人物を he あるいは "I" を用いて客観的に指示し, 対象化している点, また, saw という過去時制を用いているという点に語り手の声を聞くことができる。

### 2.2 対立的言語形式が (ii) NP + V ed の場合

対立的言語形式が (ii) ((7) c') の場合, 登場人物 Poirot に視点があり, Poirot の目から見た行為が示されているが, 語り手の時制である過去時制が用いられている点に語り手の声が聞こえる<sup>14)</sup>。

### 2.3 対立的言語形式が (iii) NP + was/were + V ing の場合

対立的言語形式が (iii) ((5) c'・d', (6) d'・e', (7) d', (8) b') の場合, 進行形が用いられている点に注意を払わなければならない。進行形には, 本質的に, 誰か意識の主体がある対象を今まさに知覚している意識を反映するという機能的特性がある<sup>15)</sup>ので, (5) c'・d' および (6) d'・e' の場合, それぞれ, 登場人物 he の視点から, 今まさにテレビの映像を見ている意識, あるいは, ビルの中を透視している意識を感知することができる。また, (7) d' および (8) b' の場合, それぞれ, Poirot あるいは登場人物としての "I" が過去の出来事を想起・回想している意識を感知することができる。したがって, (5) c'・d' および (6) d'・e' の場合, テレビを見ている観点とビルの中を透視している観点は, 共に登場人物 he にあり, 登場人物 he の目から今まさに (彼の現在から) 見ている眼前の出来事が表されている。また, (7) d' および (8) b' の場合, 想起・回想している基点は, それぞれ, Poirot あるいは登場人物としての "I" にあり, Poirot あるいは登場人物としての "I" の視点から想起・回想している出来事が表されている。

この限りでは, 「NP + V ing」句の場合と異ならないが, 進行形の be 動詞が were と was という語り手の時制である過去時制が用いられている点に語り手の声が聞かれ<sup>16)</sup>, 語っているのは語り手であることを察知することができる。そうすると, (5) c'・d' および (6) d'・e' の場合, テレビを見ている観点とビルの中を透視している観点は, 共に登場人物 he にあり, 登場人物 he の視点から今まさに知覚している出来事が伝えられるが, 語ってい

るのは語り手であるということになる。また、(7)d'および(8)b'の場合、Poirotあるいは登場人物としての“I”の視点から想起・回想している出来事が示されるが、語り手がそれを語っていることになる。

#### 2.4 まとめ

以上のように、対立的言語形式(i)の場合、出来事を体験している基点は登場人物にあるが、その体験している出来事を語っている主体は、語り手であることになる。また、対立的言語形式が(ii),(iii)の場合、出来事を見ている観点・回想している基点は、登場人物にあるが、その見ている・回想している出来事を語っている主体は、語り手であることになる。

### 3 「NP + V ing」句と物語る声

ここでは、前節の結果に基づいて、「NP + V ing」句によって表される出来事は、誰が語っているものであるかを考えてみる。

ここに、もう一度、「NP + V ing」句とその選択可能な対立的言語形式の典型例を取り出してみよう。

(4) b'. I saw Sylvia choking and myself strangling her ...

(4) b. Sylvia choking and myself strangling her ...

(5) c'. people were wading mud up to their neck ...

d'. Superman was flying by ...

(5) c. people wading mud up to their neck ...

d. Superman flying by ...

(7) c'. Gudgeon stepped ...

d'. Gerda Christow was standing over her husband ...

(7) c. Gudgeon stepping ...

d. Gerda Christow standing over her husband ...

この両言語形式を比較してみて、すぐに気がつくことは、「NP + V ing」句は、すべて、統語上、非定形式(nonfinite form)になっていることである。つまり、この非定形式というのは、I saw および He saw が省略されたり、stepped が stepping になったり、進行形

の場合、was あるいは were が省略されたものである。これら I saw, He saw, stepped, was, were は、既述したように、すべて、語り手の存在を合図する標識と考えられるので、非定形式は、これら語り手の存在を示す人称代名詞・過去時制などの標識が消去され、語り手の声が聞こえなくなった言語形式と言えよう。したがって、語り手は、自分の物語る行為の現在を登場人物の現在に移動して、自らは姿を消し、その現在から語るのは登場人物であるということになる。

#### 4 「NP + V ing」句の表現効果と選択理由

それでは、ここで、これまで考察してきたことを総括して、対立的言語形式および「NP + V ing」句が、どのような伝達様式による表現形式であるかを比較検討し、それに基づいて後者の表現効果およびその選択される理由を考えてみる。

まず、I saw・He saw あるいは進行形を伴う対立的言語形式については、出来事を見ている観点・体験している基点・回想している基点は、登場人物にあるが、その見ている・体験している・回想している出来事を語っているのは、語り手であるということになる。すなわち、対立的言語形式は、登場人物が（彼の現在から）見ている・体験している・回想しているものを語り手が（発話時からみた過去の出来事として）伝えるという具合に、登場人物の視点と語り手の声が重なり合っていて<sup>17)</sup>、多少なりとも語り手による媒介性のある（mediated）表現形式であると言えよう。

一方、「NP + V ing」句は、語り手の声が聞こえなくなり、登場人物が（彼の現在から）見ている・回想している出来事を、語り手ではなく、その登場人物自身が（彼の現在から）語っているもの、つまり、今まさに登場人物が見る・回想すると同時に語っているものを表すことになる。が、語っているものと言っても、それは、有声の語りではなく、心の中で語っている無声の語り、いわば、心の中でつぶやいていることば（unspoken speech）と言ってよいものである。そうすると、「NP + V ing」句は、登場人物が見る・回想すると同時に心の中でつぶやいていることばを示し、語り手による媒介性のない直接的提示表現形式（unmediated direct presentation）であると言えよう。

そうすると、対立的言語形式と「NP + V ing」句、両言語形式とも、視点が登場人物にある、つまり、出来事を見ている・回想している主体は、登場人物であるという点では共通しているが<sup>18)</sup>、その出来事を語っている主体が異なっているということになる<sup>19)</sup>。対立的言語形式の場合、あくまでも、語っているのは語り手で、見ている・体験している・回想している主体とは分離しているのに対して、「NP + V ing」句の場合、語っているのは登場人物で、見ている・回想している主体と一体化している。つまり、「NP + V ing」句は、出来事が登場人物の目あるいは意識を通して、読者に直接的に提示され、「再現」



(representation) を意味するミメーシス (mimesis) としての表現形式の一つであると言えよう<sup>20)</sup>。

このように考えてくると、「NP + V ing」句の表現効果は、

語り手の存在を排除して、読者に、出来事の提示が直接的であるという印象を与え、出来事を読者が目の前で直接目撃している<sup>21)</sup>かのような錯覚 (illusion) を読者の心の中に喚起し、読者を物語の中に引き込むことにある

と言えよう。「NP + V ing」句は、統語上、単に、対立的言語形式の I saw・He saw が省略されたものとか、was・were が省略されたものということ以上に、このような表現上重要な効果をもたらし、ここに、作者が、対立的言語形式ではなくて、「NP + V ing」句を選択した表現意図があり、また、ここに、「NP + V ing」句を選択した理由もあると考えられる。

## おわりに

以上のように、本稿では、物語談話に現れる言語形式とその選択可能な対立的言語形式について、それぞれ、その言語形式の表される出来事は誰の視点から見ているものか、誰が語っているものかということと同時に考えることは、その当該言語形式と他の対立的言語形式との伝達様式および表現効果の差異をはっきりと浮き彫りにしてくれるということ、また、その結果、当該の文脈において他の対立的言語形式ではなく、当該の言語形式が選択される理由も明らかにしてくれるということ、を、「NP + V ing」句の場合をその一例として示した。

このように、物語の構成に関与する重要な二つの概念、視点と物語る声を考慮に入れ、物語談話に現れるある特定の言語形式について、その言語形式によって表される出来事を見ているものは誰かということおよび語っているものは誰かということと同時に考える接近法（本稿のように対立的言語形式と比較する場合も含む）は、この当該言語形式の表現効果および当該文脈における存在理由を明らかにする場合に、つまり、物語の談話分析を行う場合に極めて有効な方法で、今後とも、さらに、この方面での新知見の発見が期待できるものと考えられる。

注

- 1) 以下、問題の「NP + V ing」句の部分には、アンダーラインを引いて示すことにする。
- 2) (1) a の場合、一般的に、Sylvia の前に I saw が省略されていると考えられ、(2) a の場合、people および Superman の後に、それぞれ、were および was が省略されていると考えられている。そこで、(1) b および (2) b などのような言語形式を、「NP + V ing」句の選択可能な対立的言語形式と呼ぶことにする。

尚、「NP + V ing」句は、Declerck (1981) で指摘されている pseudo-modifier の一つに相当するものと考えられる。「NP + V ing」句全体で、統語的には、一つの NP を形成し、意味的には、NP と V ing は nexus の関係にある。また、NP は、対立的言語形式の場合、主語として主題化された際立たされる要素となるが、「NP + V ing」句の場合、もはや主語ではなく、際立たされる要素ではなくなり、「NP + V ing」句全体が NP として一つの出来事を構成することになる。

- 3) 視点という用語は、過度の視覚性が感じられるが、ここでは、もっと広義に解釈して、出来事を知覚する点ばかりでなく、回想したり、体験したりする点など出来事を捉える基点を意味するものとする。尚、他に適語がないので、以後もこの視点という用語を用いることにするが、その際、上述した意味を含むものとする。

視点という概念は、元来、あい昧な概念で、しばしば、物語る声などと混同されて用いられる傾向があり、たとえば、Percy Lubbock とその後継者たちは、視点を語り手の物語る観点 (the narrative perspective of the narrator) という意味で用い、Henry James は、読者の観点 (the perspective of the reader) という意味で用いている。この点については、Chatman (1978: 153) を参照。

- 4) ここでは、「見ている」だけを表記しているが、視点が回想したり、体験している基点を表す場合、「回想している」・「体験している」とも言うことができる。
- 5) 物語談話に現れる言語形式の機能分析を行っていく場合、あるいは、表現効果を検討していく場合、通例、その当該の言語形式によって表される出来事が誰の視点から見ているものであるか、誰が語っているものであるかということが別々に問題とされる。が、当該の言語形式の中には、この見る者は誰かという問題と語る者は誰かという問題を同時に考慮に入れなければ、その伝達様式および表現効果という点において、他の選択可能な対立的言語形式と区別できないものもある。そのような言語形式の一例が、本稿で取り上げる「NP + V ing」句である。
- 6) 後述するように、(3) a の場合、登場人物 he が知覚していることを、(4) a の場合、登場人物としての“I”が知覚していることを、語り手が伝えるということを意味する。

尚、このような saw を含む文は、日常会話のレベルでは、あくまでも、speaker の、それぞれ、“I”と he の知覚についての単なる客観的報告 (report) を示すにすぎないが、物語談話においては、このように、出来事を体験している基点は、登場人物にあり、登場人物が今まさに知覚している体験が示される。その証拠として次のような now を含む文が見られる。

The blood rushed to her face. She stared at him helplessly.  
Now he saw fear in her eyes. (Christie<sub>3</sub>: 148)

この点については、Banfield (1982: 157-8) および Bal (1985: 101) を参照。

また、Bal (1985: 112) では、see や hear などの知覚動詞を、視点が登場人物にあるということを合図する言語的要素という意味で、coupling signs と呼んでいる。

- 7) この登場人物としての“I”が見ているものは、鏡像ではあるが、これは、現実は今まさに起こっている出来事を反映したもので、「NP + V ing」句は、登場人物としての“I”が今まさに見ている出来事を表すと言ってもよいだろう。
- 8) この場合も、登場人物 he の目から見ているものは、テレビの映像ではあるが、現実の起こった出来事を再現しているもので、「NP + V ing」句は、登場人物 he の目から見ている出来事を表すと言ってもよいだろう。
- 9) 尚、e では、he が「スーパーマン？」と思わずスーパーマンの登場に驚きと疑問の混ざりあった声を発し、f では、スーパーマンの登場を確認するかのように語り手が SUPERMAN! と語っている。
- 10) fine-lookin', bendin', crossin' および 'nother による正書法は、この文を発話した主体の発音の仕方 (pronunciation) 忠実に反映したものである。この点からも、この箇所が、登場人物 Gus の視点が支配する部分であることが裏付けられる。
- 11) b のような分詞構文は、意識の主体がある出来事を体験している意識を反映する言語形式である。詳細については、拙稿 (1984・1987) を参照。
- 12) ここでの V ing 形式の機能は、拙稿 (1984・1985・1987) で論じた分詞構文の場合と同じように、登場人物が出来事を今まさに知覚している意識、あるいは、今まさに想起・回想している意識を反映することにあると言えよう。Langacker (1975・1982・1987) で指摘されているように、動詞の語幹に -ing 形式を付加することによる意味的効果は、過程 (process) を無時間の関係 (atemporal relation) に変える、つまり、行為を時間に無関係な静的・超時的な状態に変えることにあり、このような意味的特性をもつ V ing 形式は、登場人物の知覚している、あるいは、想起・回想している意識を表すのに最も適切な言語形式であると言えよう。
- 13) 出来事を想起・回想している場合、現実にも前に起こっている出来事を見ている訳ではないが、いわば、過去の出来事を頭の中で今まさに見ているという意味で、この場合も、登場人物が出来事を見ているとも言えることができよう。尚、以下では、「想起・回想している」は「回想している」という代表した言い方を用いることにする。
- 14) このような場合、しばしば、過去の文法的形態は保持しているが、物語の中ではその過去の意味作用を失ってしまっている、と論じられる場合がある。が、それでは、なぜ、過去時制は、過去の文法的形態を保持するのだろうか。語り手が物語る発話時は、読者により、物語られる出来事よりも後のものとして理解される。つまり、物語られる出来事は、物語る声よりも過去のもので、したがって、過去の文法的形態を保持するのである。物語られる出来事は、どんなものであれ、語り手の発話時(現在)からみれば、過ぎ去った過去のものである。Ricœur (1988: 164-5) を参照。
- 15) 拙稿 (1982) では、進行形を心理的装置と見なし、進行形は、送信者が対象を見つめている・対象に意識を向けている、あるいは、出来事を体験している心理的時間を反映したものとした。詳細は、拙稿 (1982) を参照。
- 16) 注 14) を参照。

- 17) 「重なり合う」を英語で言えば、superimpose に相当し、重なり合っているために、一方が見えなくなるのではなく、いわば、二重焼付けになっていて、両方が「重なり合って見える」ということを意味する。
- 18) ただし、対立的言語形式が He saw・I saw を伴う(i) の場合、登場人物の機能は、出来事を体験することであり、「NP + V ing」句の場合、登場人物の機能は、出来事を知覚することにあるので、この限りではない。が、視点が登場人物にあるという点では、他の対立的言語形式の場合と同じである。
- 19) Uspensky (1973) にならって言えば、心理的平面 (psychological plane) では、同じ主観的視点 (subjective point of view) をとるが、時間的平面 (temporal plane) において異なっているということになる。
- 20) ミメーシス (mimesis) とは、本来、ギリシア語で、アリストテレスが Poetics (『詩学』) において詩を人間行為の模写 (an imitation of human actions) と言った時の模写、つまり、再現 (representation) を意味する。詳細は、Abrams (1985: 83) を参照。ミメーシスは、語り手による媒介性のある伝達様式、ディエゲシス (diegesis) と対峙され、showing あるいは direct presentation と呼ばれることもある。

ミメーシスとしての表現形式とは、少なくとも、言語的特徴として、自己指示 (self-reference) は一人称代名詞で行われ、動詞は現在時制が用いられ、登場人物にふさわしい語・言語形式・言い回しの選択が行わなければならない。この条件を満たす表現形式は、Genette (1984: 193) では、internal monologue だけである、と述べている。が、Chatman (1975: 250) では、internal monologue (彼のことばで言えば direct free thought) 以外に dramatic monologues, dialogue, soliloquy, direct tagged speech and thought などの登場人物の話すことば、あるいは、思考内容を言語化したもの (verbalized thoughts) もミメーシスとしての表現形式に属する、と指摘する。さらに、本稿で論じてきたように、「NP + V ing」句もミメーシスの表現形式の一つに付け加えることができる。

三人称物語の場合、典型的には、人称は三人称で、時制は過去時制であるため、このミメーシスを作り上げるために様々な工夫が行われる。極端な場合には、物語の展開の途中より、突然、三人称・過去時制から一人称・現在時制へと人称と時制の切り替えを同時に行う場合もある (Joyce の Ulysses, II 節, 第一章)。一般的には、過去時制という語り手の存在を示す言語的特徴を消去する方法が取られる。本稿で論じてきた「NP + V ing」句の場合、過去時制を消去するために、I saw とか be 動詞を省略して非定形式にするという方法が取られた。また、最初から、時制を現在時制にするために、present tense story の物語形式を用いる場合もあるが、どうしても、自己指示する場合、三人称代名詞を消去できない場合が生じ、ミメーシスとしての表現形式から一步後退せざるを得ないことになる。

しかしながら、一般的に、物語談話における表現形式には、何らかの形で物語る声 (narrative voice) が感じられ、「再現」を意味する厳密な意味でのミメーシス (pure mimesis) とした表現形式は、稀にしか存在しないと言われていて、現実には、余り厳密でない意味でミメーシスという用語が用いられるのがふつうである。たとえば、本稿で対立的言語形式として論じてきた進行形を含む文も、語っている主体は語り手であるが、出来事を見ている主体は登場人物であるため、過去における現在 (Now-in-the-Past) という印象を生み出し、ある種の illusion を引き起すミメーシスとしての表現形式として扱われる場合がある。この点について

は、Brinton (1980)・Fehr (1938)を参照。

また、先に、「NP + V ing」句もミメーシスとしての表現形式の一つに属すると述べたが、次の事例 (i)・(ii) のように「NP + V ing」句が自由間接話法の中の一部として現れるために、自己指示として用いられる代名詞が三人称であったり、心の中に生起している思考内容を表す部分であるにもかかわらず、was が用いられている場合があり、純粹なミメーシスとしての表現形式とは言いたがいが場合もある。

- (i) She switched on the lamp by her bed and looked at the clock that stood by the lamp on the table. It was ten minutes to three. Edward passing her door and going down the stairs at this hour in the morning. It was odd. (Christie<sub>2</sub> : 174)
- (ii) “John,” she thought. “If only John were here to tell me what to do. But John would never be there again. Never·never·never . . . Mutton getting cold·congealing on the table . . . the bang of the consulting-room, John running up two steps at a time, always in a hurry, so vital, so alive . . . (Christie<sub>2</sub> : 104)

が、このような自由間接話法の中の一部として用いられる言語形式も、Banfield (1982) では、ミメーシスとしての表現形式として認められている。

したがって、物語談話に現れる表現形式には、厳密な意味でのミメーシスとしての表現形式から擬似ミメーシスとしての表現形式、さらに、語り手の声しか聞こえない表現形式に至るまで、様々な物語の提示の仕方が考えられ、一種のスペクトルを形成していると言えよう。

尚、ミメーシスとしての表現形式の存在および同定化については、従来より様々な議論が展開されていて、結論はまだ出されていないのが現状であり、さらに詳細な議論については、紙面の都合上、稿を改めなければならない。

- 21) Chatman (1975 : 215) では、直接目撃すること (direct witnessing) とは、ページをめくり、ことばを読んでいるのだけれども、読者自身がまるで問題の場面に居合わせているかのように見える (as if he (= audience) were personally on the scene) ことである、と述べている。

## 参 考 文 献

- Abrams, M. H. (ed.) 1981. *A glossary of literary terms*. Holt, Rinehart and Winston.
- Akasofu, T. (赤祖父哲二) 1980. 「歴史叙述と小説(二)」『文章文化論』143-51. 開拓社.
- Anzai, T. (安西徹雄) 1983. 『英語の発想』講談社.
- Bal, M. 1985. “Focalization.” In *Narratology: introduction to the theory of narrative*, 100-14.
- Banfield, A. 1982. *Unspeakable sentences: narration and representation in the language of fiction*. Routledge and Keagan Paul.
- Benveniste, E. 1971. *Problems in general linguistics*. (Trans. M.E. Meek) University of Miami Press.

- Booth, W. C. 1961. *The rhetoric of fiction*. The University of Chicago Press.
- Bowling, L. E. 1950. "What is the stream of consciousness technique?" *PMLA* 65, 333-45.
- Brinton, L. 1980. "'Represented perception': a study in narrative style." *Poetics* 9, 363-81.
- Chatman, S. 1975. "The structure of narrative transmission." In R. Fowler (ed.) *Style and structure in literature*, 213-57. Cornell University Press.
- . 1978. "Discourse: nonnarrated stories." In *Story and discourse: narrative structure in fiction and film*, 146-95. Cornell University Press.
- Cohn, D. 1978. *Transparent minds*. Princeton University Press.
- Declerck, R. 1981. "Pseudo-modifiers." *Lingua* 54, 135-63.
- Doležel, L. 1967. "The typology of the narrator: point of view in fiction." In *To honor Roman Jakobson I*, 541-52. Mouton.
- Fehr, B. 1938. "Substitutionary narration and description: a chapter in stylistics." *English Studies* 20, 97-107.
- Fowler, R. 1986. "Point of view." In *Linguistic criticism*, 127-46. Oxford University Press.
- Friedman, N. 1955. "Point of view in fiction," *PMLA* 70, 1160-84.
- Genette, G. 1980. *Narrative discourse*. (Trans. J. E. Lewin) Cornell University Press.
- . 1983. *Nouveau discours du récit*. Seuil. 和泉涼一・神郡悦子訳『物語の詩学』書肆風の薔薇, 1985.
- Komesu, O. (米須興文) 1984. 『ミメシスとエクスタシス——文学と批評の原点』勁草書房.
- Langacker, R. W. 1975. "Functional stratigraphy." In R. Grossman, J. San and T. Vance (eds.) *Papers from the parasession on functionalism*, 351-97. Chicago Linguistic Society.
- . 1982. "Remarks on English aspect." In P. J. Hopper. (ed.) *Tense-aspect: between semantics and pragmatics*, 265-303. John Benjamins.
- . 1987. *Foundations of cognitive grammar*. Stanford University Press.
- Leech, G. N. and M. H. Short. 1981. *Style in fiction*. Longman.
- Martin, W. 1986. "Points of view on point of view." In *Recent theories of narrative*, 130-46. Cornell University Press.
- Mochizuki, N. (望月奈良江) and Kumakura, C. (熊倉千之) 1987. 「日本の近代小説に於ける語り手の視点」『日本語学』11, 83-92.
- Makayama, M. (中山眞彦) 1988. 「物語と物語文—日本語・フランス語の対比」『文学』56, 23-39. 岩波書店.
- Nerbonne, J. 1986. "Reference time and time in narration." *Linguistics and Philosophy* 9, 83-95.
- Ohnuma, M. (大沼雅彦) 1987. 「「雨のなかのネコ」の文法的一面」『日本語学』11, 70-82.
- Ricoeul, P. 1984. *Temps et récit*. Seuil. 久米博訳『時間と物語II——フィクション物語における時間の統合形象化』新曜社, 1988.
- Ryan, M.-L. 1981. "The pragmatics of personal and impersonal fiction." *Poetics* 10, 517-39.
- Stanzel, F. K. 1984. *A theory of narrative*. (Trans. C. Goedsche) Cambridge University press.
- Todorov, T. 1967. *Littérature et signification*. Librairie Larousse. 菅野昭正・保刈瑞穂訳『小

山 岡 實

- 説の記号学：文学と意味作用』大修館書店，1974.
- Uspensky, B. 1973. *A poetics of composition*. (Trans. V. Zavarin and S. Wittig) University of California Press.
- Weinrich, H. 1964. *Tempus, Besprochene und erzählte Welt*. W. Kohlhammer. 脇坂豊他訳『時制論』紀伊国屋書店，1982.
- Yamaoka, M. (山岡實) 1982. 「Stative Progressive の機能的側面についての一考察」大阪市立大学大学院英文学研究会『Queries』19, 9-24.
- . 1984. 「分詞構文における Ing 形式の機能的特性とその談話機能」大阪市立大学大学院文学研究会『Queries』21, 23-36.
- . 1985. 「X, Y ing 構文における Y ing 形式の談話機能と表現効果について」『相愛大学研究論集』1, 119-36.
- . 1987. 「懸垂分詞の存在理由をめぐって——談話分析の観点から——」『相愛大学研究論集』3, 111-21.
- . 1989. 「談話分析における視点と物語る声」『英語青年』134 巻, 12 号.

例 文 の 出 典

- |                       |  |
|-----------------------|--|
| Christie <sub>1</sub> | Christie, A. "In a Glass Darkly." In <i>Miss Marple's 6 Final Cases and 2 Other Stories</i> . 1986. Fontana. |
| Christie <sub>2</sub> | Christie, A. <i>The Hollow</i> . 1985. Fontana.  |
| Christie <sub>3</sub> | Christie, A. <i>Appointment With Death</i> . 1988. Fontana.  |
| Kotzwinkle            | Kotzwinkle, W. <i>Superman III</i> . 1983. Warner.   |
| Saroyan               | Saroyan, W. <i>The Human Comedy</i> . 1967. Dell.  |
| Woolf                 | Woolf, V. <i>The Waves</i> . 1985. Granada.  |